

“平和学”をめざして

国際学部教授 戸田三三冬

はじめに

この湘南の地に文教大学の国際学部ができたのが1990年、今年で13年くらいになります。この13年間、国際学部に入って来た学生たちと一緒に、いわばお互いに育ててきたというようにして、暮らしてまいりました。最初の学生（1期生）が3年になったとき、国際関係学系必修の「国際関係論」のクラスが始まりました。いまご紹介の「平和学」はこのクラスのなかで、ちょうど今年で10年間、学生たちといっしょに考えて来たものです。

いまは21世紀、社会科学の世界も、19世紀に出来上がって来た「実験室科学」のようなものではなくてきています。研究者も市民も、起こっている現象のなかに同時に入って、それを自分たちで見つめたり、関係しあったりしながら、自分たちも変わってゆく。そのプロセスのなかで、研究も学問もつくられてゆく。人間は神様ではないので、起こっている現象を完全に外から眺めることはできません。純粋な「客観性」の存在は疑わしくなっています。私自身、客観は主観の反映である、と考えています。

そして私の話は、感興に乗ってどこへゆくのか分からない、と学生たちに言われます。今日のお話も一種の即興演奏のようになると思いますので、皆さんの方も、ご自分のなかで即興の演奏をされながら、聴いていただければいいなあ、と思います。

平和学

さきほど平和学のご紹介がありました。国際的には「国際平和学会 IPRA (International Peace Research Association)」ができていて、2年に1回、当番国をきめて国際会議を開いてきました。日本も1992年に当番国を引き受けて、京都で会議をやり、今年韓国で開かれました。日本国内にも「日本平和学会」がありまして、1年に2回、研究大会を開き、先日も広島で会議があったところです。

平和学会は、平和学を志す人びとが集まっているところですが、中に入っている会員は、千差万別、実にいろいろの方がいます。政治学、経済学、宗教学、哲学、

文学、音楽、文化人類学、社会学、こういう分野の方々が入っており、勿論平和教育をやっている方、中学校や高校の先生たち、市民運動をやっている方たち、ちかごろ目立って来たのはジェンダー論をやっている女性の元気のよいグループなど、平和という問題をこれから考えてゆく動きになっています。つまり、平和学というのは今つくられつつある、ある意味では学問分野、またある意味では人類の将来を見据えるような知的営為として、むしろ冷戦後の方が成長して来ている分野です。

冷戦時代は、平和というと、ややもすればアメリカの平和か、ソ連の平和か、などというふうになんかこしいことになっていました。今は、平和といいますと、国際関係論・平和学のクラスでは、学生たちが、いまやアメリカとイラクの帰趨やいかに？と固唾を飲んでいます。

湾岸戦争は1991年でしたが、その後、ある意味では戦争状態がグローバルには続いているところですね。とくに去年の9月11日以降の事態のなかで、ものすごく緊迫した状況のなかで国際関係論や平和学を考えるという、幸か不幸か、こういう年は二度とないだろうとあって、皆で考えながらいるわけです。今の情勢ですと、平和の反対は戦争、ということになるわけです。そしてその戦争も極めてイメージしやすいものとして、私たちの目の前に展開しているわけですね。そして現在の俗にいう「拉致事件」というのも、戦争が終わってからの、他国による日本国民の拉致ということが問題となっています。しかし、ここにいらっしゃる年代の方たちは皆さん御存じだと思いますが、状況も時代も違いますが、朝鮮半島との関係では、例えばここに『強制連行された朝鮮人の少年』という本があります。これだけではなくもっと沢山の文献がでていますが、「強制連行」をもし「拉致」と言い換えたら、少なく見積もって政府統計でも、強権的に日本に連行された朝鮮人の数は1939年から終戦まで72万人余、つまり朝鮮に住んでいる人びとを「拉致」したわけです。一人の命の重さは等価ですから、70万人の命と十数人の命とを秤にかけることはできません。けれども、70万人には70万の家庭があったとは思いませんか？十数人には十数の家庭があるように、70万の家庭のお父さん、お母さん、子供たちはどのように感じたでしょうか？ そのことを考えることなしに、私たちは今の事態に向き合うことはできないだろうと思います。これも平和学の一つの課題です。勿論ご存じのように、朝鮮に対しては「創氏改名」という名前を押し付けた行為がありました。それから、元従軍慰安婦の問題もあります。そもそも軍隊のあるところ、戦争というのは、半分以上気の狂った状態にさせなければ普通の人には戦えない、というところがあるでしょう。つまり戦争状態のなかでは、すべての人が気が狂う、という

ことができると思います。その反対の平和とは何だろう、ということになります。

戦争の反対が平和だということは、すぐ分かることです。でも、戦争というのは目でみてすぐ分かるのですが、平和というのは、すごく難しいと思います。争いが起こってなければ平和かという、そうとも言えないところがあります。表面は平和に見えるけれど、皆が心の中では恨みあっている。それも平和と呼ぶのでしょうか？平和学では、ここから一步、先へ進みます。そして、ただ戦争がないだけの平和を「消極的平和」と呼びます。では「積極的平和」というのはどのようなものでしょうか？それを明らかにするために平和学では、「構造的暴力」という考え方を援用しています。

構造的暴力

構造的暴力という考え方は、ノルウエーの平和学者ヨハン・ガルトゥングという方が言い出したことで、現在、日本平和学会のなかでは、この考え方が主流になっています。ヨハン・ガルトゥングという方は、学生時代に深くガンジーの影響を受けた方なんです。勿論ヨーロッパの思想も深く勉強した方ですが、まだ大学院生のころ、彼の先生がガンジーを非常に好きで、ガンジーの著作（とても品格のある英語です）をことごとく並べていわば編集する、という仕事を先生から頼まれます。そこでガルトゥングさんは、期せずして組織的にガンジーの思想にふれ、深い影響を受けます。その後日本女性と結婚し、いまは京都に住んでおられます。ヨハン・ガルトゥングと言いますと、紛争解決において世界的な知名人です。

構造的暴力という考え方においては、「暴力」のない状態を平和と呼びます。そして、人間あるいは人間集団の、身体的あるいは精神的な自己実現の現状が、その人たちがもつ潜在的な自己実現の可能性を下回るとき、そこには暴力（構造的暴力）が存在する、と考えます。つまり、直接的であれ、間接的であれ、暴力のあるところには平和はない、これがガルトゥングの平和学です。では、暴力とは何でしょう？例えばいま、私が前にいる方の所へつかつかと行ってガン！と殴ったら、これは誰の目にも明らかな個人的暴力、直接的暴力ですね。ですが、目に見えない暴力として、それが社会のなかに構造的に組み込まれていて、知らない間に間接的に暴力の影響を蒙っている、ということがあります。これは構造的暴力に晒されている状態です。

ガルトゥングさんがあげている一つの例は、一人の夫が彼の妻をなくったら、これは個人的暴力であるが、百万人の夫が百万人の妻を無知の状態のまま放置してお

いたら、これは構造的暴力である、というものです。例えば、いま問題となっている家庭内暴力も、夫の妻に対する直接的暴力ですが、でもその社会的背景を考えると、明らかに父権性社会という構造的暴力の存在に突き当たります。そのなかで自己実現の可能性を阻まれている男女の関係が浮かび上がります。ですから「構造的」というのは、どこかに「社会的共謀性」が組み込まれている、と考えると分かりやすいかも知れません。つまり、社会的に有利な立場に立っている人びとが、意識的にか、無意識的にか、共同してふるっている目に見えない暴力で、私たちも生活する上で知らず知らずの間に、それに加担させられてしまう、と言ったらよいかもしれません。

例えば、環境問題というのも、それかなと思います。多分ここにいらっしゃる方は、「公害」という言葉が登場した頃や「公害病」としての水俣病が大きな社会問題になった頃を覚えておいでだと思います。「公害」というと、だれの責任でもないような響きがありますが、水俣病は、チッソという私企業が水俣湾に垂れ流した有機水銀をふくむ工場廃水が原因です。有機水銀が魚介類を汚染し、食物連鎖でだんだん毒素が濃縮され、それを最後に食べた人間が発症する有機水銀中毒です。人間自身の身体という自然が破壊され、家庭が破壊され、人間と人間の関係も破壊されました。私も患者さんたちがお位牌をもって都内をデモしたりしたのを見た世代なんです。そのとき、チッソの有機水銀が原因だと指摘した研究者群がいた一方、その因果関係を否定した研究者群がいました。ときの日本国政府は、責任を曖昧にし、被害は拡大しました。ここまで来ると、明白な構造的暴力が、患者さんの上に働いていることがよく分かります。

いま問題となっている地球の温暖化も、こうすれば儲かるという国際的な資本家群がおり、その人たちがそれぞれの政府を動かして基準を甘くする、京都議定書は米国の国益にあわないというので批准しない、といった事態があります。先日もヨハネスブルグで行われたいわゆる環境サミットでも、国家は国益にしばられて思うような合意ができなかったわけですね。私たちが毎日暮らしているなかでも、ダイオキシンや環境ホルモンに汚染されたものに取り囲まれています。例えば歯磨き粉やシャンプーのなかにも、危険なものが沢山あります。企業は、この歯磨き粉を使えばこんなに歯が白くなりますよ、という宣伝はしますが、そのなかにもどれだけのダイオキシンが含まれているか、などということは売れなくなるから言いません。はっと気がつくと、私たちの日常生活は健康的とは言いがたいものがあります。これって、ほんとに平和なのでしょうか？ 私たちの食べるもの、飲むもの、使うもの、

選択の余地が極めて少ない構造的暴力に取り囲まれている、ということが出来るでしょう。権力格差や経済的格差、植民地収奪や社会的差別、放射能被害や産業公害、これらはグローバルな構造的暴力ですが、私たちの毎日の生活も、気がつかないとそれに加担してしまうような形で、構造的暴力のなかに組み込まれています。地球の温暖化も、私たちが見るテレビの時間や夜間の照明やネオン・サインの量にも密接に関係します。

第二次世界大戦で日本が負けた時、私は小学校6年でした。群馬県の集団疎開先では毎日高粱（コーリャン）の薄い雑炊で、じゃがいもなどは御馳走、米の御飯など食べられませんでした。東京に帰ると米軍占領下で、ララ物資という食糧援助が放出され、配給されました。このような状況のなかで、日本人はだんだん米を食べなくなり、食生活は欧米型になってきました。島田彰夫さんという方が『食と健康を地理からみると』（農山漁村文化協会、1988年）の中で言われているのは、日本人の体質は縄文時代以来変わっていないのに、この50年の急激な食生活の変化でさまざまな病気が増えている、ということです。それで『伝統食の復権』（東洋経済、2000年）を唱えておられるのですが、米国が有数の小麦輸出国であることを考えると、戦後、日本社会は米国資本によって餌付けされた、ということが出来ます。これは世界経済をどう回して行くか、どうやって儲け、儲けたものをもとにして国益を進展させて行くか、そしてどうやって世界を資本的にも、政治的にも支配して行くか、これはウオーラ?ステインという方の研究（『史的システムとしての資本主義』岩波書店、など）があるのですが、そういう仮説を立ててみると、世界の人びと、日本の社会に住む人びとがいかに踊らされて来たか、よく見えてきます。

さらに言えば、明治維新というのがありましたね。今から150年ほど前です。そこで行われたことは、欧米化です。それは近代化とも言われていて、要するに近代国家を造らなければ、欧米による植民地化の危険にさらされていました。つまり欧米のようにやらなければいけない、という道をひた走りに走って来たわけですね。そして私たちもその中にいたわけですから、知らない間に、頭の中がヨーロッパのものはいいものだ、ヨーロッパやアメリカは進んでいるけれども、日本は遅れている、というふうになって来ていたと思います。それで今気がつくと、こういう環境汚染という一つの構造的暴力の中に立たされています。アトピーのお子さんやお孫さんを抱えておられる方も多いと思いますが、さきほど申したような食事の質の変化とかダイオキシンの影響であるとか、いろいろの研究が出ています。明治時代に比べれば、水も空気も汚染されているのは常識となり、浄水器や空気清浄器が賣れてい

ます。

ひところ、眼鏡をかけてカメラを持っていれば日本人だ、という笑い話がヨーロッパにありましたが、これほど近視の人が多い先進国はないそうです。近視は病気である、とあるお医者さんが主張していて、我が身につまされたのですが、確かに、例えばナポリ人の目はとてもいいです。私はイタリアの歴史が専門なので、イタリアに関しては自信をもって証言できますが、イタリアには原発のないこともあって、目ぬきの通りでも街灯や照明は暗いです。ナポリの国立図書館は旧王宮を改造したもので、天井画のある巨大な読書室に大きな檜の長い机が置かれていますが、そこに所々60ワット位の電球のスタンドがセットされています。まことに優雅な図書館ですが、私には暗すぎてスタンドのすぐ傍の座席を確保しないと本が読めません。ところが彼等は、薄暗いなかでも平気で頁をくっつけています。「ナポリ人の目は暗闇に強い、これは文明の質に関係するのかも知れない」と、いつかエッセイに書いたことがあります。これもよく考えてみると、日本人の目の健康も構造的暴力にさらされている、ということが出来るかもしれません。

ですから、ある意味ではとても危機的状況なのですけれども、皆が平気で暮らしているから、明日も朝がくるだろう、というふうに皆やっているわけですが、確かにこのあたりでよく考えないといけないんじゃないか、と私は思います。話はプログラムから脱線して走っているようですが、脱線しついでにもう一つお話ししますと、いま討たれようとしているイラク、そのお隣のイラン、スンニー派とシーア派が入り交じっていますがイスラム圏ですね。このあたりのユーラシア大陸・イスラムの世界が、下に石油が通っているということで、改造されようとしているのではないかと思います。そのイスラム圏のモロッコに、この間友だちになったばかりのエルマンジュラという私と同年の面白い方がいます。彼は時々日本にきて講演し、何冊も翻訳があります（『第一次文明戦争』『第二次文明戦争としてのアフガン戦争』『文化的脱植民地化』、御茶の水書房）。初め私は彼の言っていることをイスラム世界の話として聞いていたのですが、この間ふっと、これってイスラムだけじゃなくて、もしかしたら日本とか東アジア全体もそうじゃないかな、と思いはじめています。彼が何を言ってるのか。

そもそもイスラム世界は7世紀から10世紀にかけてギリシアやペルシアなどの古い文明を吸収しながら地中海世界全体に広まって行きます。10世紀半ばになると壮麗な文化文明になるのですが、そのころから12、3世紀にかけてヨーロッパ人は、アラビア語を当時のヨーロッパの言語であるラテン語に翻訳し、イスラム文明を吸

収めます。ですからイスラム文明はヨーロッパの先行文明です。でも、そうであるが故にか、そのことを忘れ去ってしまった故にか—このあたりは、中国文明に学んだ日本文明とよく似ているのですが—急速な近代化を遂げた後は見下げるようになり、やがてイスラム世界は、19世紀から20世紀にかけてヨーロッパの植民地にされてしまいます。

これから先が主題ですが、例えばエルマンジュラさんの国のモロッコはフランスによって植民地にされ、植民地を統治するためにフランス軍が駐留しました。そうするとこれは目に見える支配で、辛いことですが事態は簡単です。ところが、1960年代になると植民地はどんどん独立し、モロッコも独立して、元の宗主国からは縁が切れました。しかし、それ以前に、殆どのモロッコのインテリはパリで教育され、すべてフランス流になっていました。その人たちを国に帰して統治をさせると、エルマンジュラさんが言うには、もはや占領軍はいらない、何の金もかからない、放っておけば自分達が養成したインテリ達が、自分達フランス人の好むような政治をしてくれる。そしてやっている当人たちは、そのことに気づいてすらいない。これは、狭くいえばモロッコの、広くいえばイスラム全体の大変な問題だ。こんなふうに洗脳されてしまっている、つまりヨーロッパ化されてしまっている我々がどうなるのかを、よく考えなければいけない。我々は共通の歴史へ還ろうではないか。私たちが自身の物語を、貧しくともプライドをもって皆で築こうではないか。……エルマンジュラさんが言っていることをつづめると、このような「文化的脱植民地化」という問題提起となります。

私は、これを身に沁みて読んで、はっと気がつくと、じゃ日本は？日本は精神的な餌付けがされていないだろうか—洗脳されていないだろうか？明治維新以来150年、アメリカ軍占領以来—いまは占領軍という名ではなく「在日米軍」が2001年1月1日現在、89ヶ所の基地（沖縄37、神奈川15、長崎11、東京7）に存在しています—50年、そういうふうな中で、果たして私たちの精神文化的プライドというものがあるのだろうか？と考えざるを得ませんでした。で、どこへ還るの？というのが問題で、本当はそれが今日の主題です。

40億年のわたしのいのち：わたしがわたしらしく

残された時間はわずかですが、以上を長い前置きとして、後半に入りましょう。思っても見ない展開になったのですが、プログラムの(4)支配とはなにか？権力の支配：国家 金の支配：資本主義 (5) 国家がわたしをつくる？ 資本主義がわた

しをつくる？ という部分は、ほぼ今の話のなかに尽されているかな、と思います。私たちが現在ここにあるのは、相当のところ「造られているわたし」ではないでしょうか？

では「造られていないわたし」は、どこにいるの？どこに希望があるの？ということになりますね。イスラムの場合は確かにイスラム共同体のウンマというものがありますが、日本の場合どこに還るの？江戸時代？還って幸せになるかな、という処はあまりささそうですね。そうすると何にもない、ということになります。還るところは何処にも無い。では、いまの自分から出発するしかないの？ということになるんですが、それでここから（1）の「40億年のわたしのいのち：わたしがわたしらしく」というところに行きたいわけです。

このあたりは生物学者の中村桂子さんの受け売りです。中村さんは、DNA研究の成果を踏まえ、約40億年という平等の歴史を背負うものとして、人間を含むすべての生物の多様性と相互の関係をとらえなおそうと、「生命誌」を提唱している方です。ご興味のある方は、『鶴見和子対話まんだら 四十億年の私の「生命」 中村桂子の巻』（藤原書店、2002年）をご覧ください。とてもいい本です。分かった範囲でのご紹介ですが、生物の細小単位は細胞である。しかも細胞の中には、DNAという遺伝子の本体である物質が入っている。一個の細胞のなかに入っているDNAの総体をゲノムといいます。それが生物の性質を決めて行くということです。ヒトのDNA、アリのDNA、とうもろこしのDNA、とみんなあるわけですね。しかし、類としてのヒトのDNAはずっと続いていきますが、ゲノムと細胞の組み合わせで創出された個体は、唯一回の存在なのです。つまり、わたしという個体のゲノムは、生命の歴史の中でたった一回の組み合わせから生まれた独自のもの。四十億年の生命の歴史を継いでいるけれども、かけがえのない、たった一つの個としてのゲノムなんですね。そのことに中村桂子さんは気づいて、「DNAとして続いていく大きな流れの中にありながら、やはり個は個なのだと思った時、大らかさと厳粛さの混じり合った新しい気持ちが生れた」と書いておられます（『自己創出する生命』）。

「わたし」というゲノムは、皆さんお一人おひとり、たった一つのかげがえのないものなんですね。その自分のゲノムをどうやって輝かせていくか、「わたしがわたしらしく」ありたい、というときに会うのが、ガルトゥングさんの言葉です。自分の可能性が全部開花しないときは、そこに暴力がある。つまり自分のゲノムのもっている可能性を全部開花させられないときは、そこに暴力がある、という平和学の課題です。えっ、そんな……それじゃ暴力だらけじゃないの、そんな理想的な状態っ

であるの？となるかもしれませんが、理論的には、その通りだと思います。そこに暴力があるとすれば、平和学ですから暴力に着目しなければいけない。その暴力をどうしたら取り除くことができるか。

そこで、さらに三木成夫さんの『胎児の誕生』（中公新書、2002年）という本を見ましょう。三木さんは解剖学者で、人間の胎児がお母さんのお腹の中で生長してゆくプロセスそのものが、生命発生以来の進化の過程であることを、胎児の標本を使って実験的に証明なさり、そのことがこの本のなかに易しく感動的に記されています。ぜひ一度お読みになることをお勧めします。そのお話は、四十億年の私の生命に関係します。生命誕生というと、最初はドロドロとした宇宙の中から地球が生れて、はじめ海水のなかに生命が誕生するわけですね。三木成夫さんの証明に従えば、私たちは自分の個体のなかに、四十億年の生命の進化過程を再現する、という経験をして（忘れてしまうわけですが）それを踏まえて「いまここ」にいるわけですね。これを中村桂子さんの言葉で言えば、四十億年の生命が私たちの「いま」のなかに生きているわけです。中村さんはここを、例えば樹木を切る、切られた木のなかに蓄えられた時間を考えると、環境破壊というのは時間を壊しているんですよ、とさらっと言われます。これってすごい発想だなあ、と思います。例えばアフガニスタンの空爆でもイラク爆撃でも、あのあたり一帯は人類の文明発祥の地ですよ。一方、アメリカの文明の時間は短いので、感覚的には文明の古さを理解できないのかも知れませんね。戦争や空爆は、その文明というものになってからの時間の積み重ねを壊してしまうのですね。

三木さんにしても、中村さんにしても、生命という悠久なものを学問の対象とするお立場からの発言は貴重です。平和学のコンセプトを、もっと豊富にしてゆける可能性が見えて来ます。

「身土不二」と自治思想

「わたしがわたしらしく」生きる、それを閉ざしている「暴力」の話に戻って考えてみましょう。中村桂子さんの生命誌の立ち場から見ると、例えばここに野原があります。放っておくと雑草が生えてきますね。それはその土地に適した複数の植物がお互いに助け合いながら、ある植物相をつくるのですね。それと対極にあるのが、たとえば人工的にトマトを作るときです。草を刈ったり肥料をやったり色々なことをしないと、育たないですね。こういう積み重ねで、今はとうとう遺伝子組み換えまで行ってしまったわけですが、この対比で近代国家と社会の「暴力性」（＝

構造的暴力)を考えてみると、面白いことが見えてきます。

フランス革命以降の、いま皆がこれこそは国家だと思っている近代の国家、資本主義を基盤にし、機械文明を援用して戦争もする国家、その中で男は兵士、女は未来の兵士を生んでケアする者、という男女分業が画然と行われてきました。近頃はだいぶ崩れてきましたが、男は泣くな、泣くのは女だ、とか言われて泣く事もできない。男は家族を背負う者だと言われて、過労死になるまで働く男が作られてきました。では女は楽をしてきたかという、そうではなくて、高度成長期の頃は、帰宅した夫の「めし！ふろ！ねる！」という叫び声に答えて、企業戦士の生活を支えてきました。完全な男女分業のもとに日本資本主義は生産性を高めてここまできて、今や危ういところにいます。しかし、これは男女一人ひとりの暮らし方に向けられた、構造的暴力ではないのでしょうか？非常に人工的なものとして国家が作られ、社会が作られた。で、非常に人工的なものとして一人ひとりの教育が行われてきた。皆やってくるから当たり前とされてきた。これって、わたしがわたしらしく、という「本然のすがた」からみると、おかしいのではないのでしょうか？ここには、最大級の構造的暴力が懸けられているのが見えませんか？あたかも人工的にトマトを作るように、国家や社会も作られてきたのではないのでしょうか？では野原のように、放っておくとどうなるのでしょうか？放っておけば、利益本位の人間集団が現れないかぎり、国家なんか出来ないかもしれませんね。

ひとつ違う角度から、井戸を掘るお医者さん、中村哲さんのお話を聴きましょう。彼は本来ハンセン氏病の治療のためにアフガニスタンに渡ったんですね。ところが、行ってみたらそれどころじゃない。まず、水が無いんですね。で日本は昔から井戸掘りの技術がありますから、まず井戸を掘ることから始めてもう、十七、八年、向こうで生活して居られます。日本でも方々で講演され、もう有名なので、お聞きになった方もおられるでしょう。その中村医師が「自給自足の農村の復活の大切さ」について、シンポジウムのパネリストとして、次ぎのような発言をされています(『朝日新聞』2002年9月17日朝刊)。中村さんはジャララバードで活動されていますが、なぜ難民が出たかという認識からして現地と日本側では違う、難民の半数以上は干ばつから逃れてきた人びとである、と言われていています。戦争前のアフガニスタンは、緑に覆われて本当にきれいです。国際学部の若林先生がユーラシア協会というNPOに参加されていて、内戦前(1978年春)のアフガニスタンの写真を見せて下さったのですが、ゆるい丘陵地帯をラヴェンダー畑がどこまでも続いていて、息を飲む程美しい風景です。でもこれは爆撃でめっちゃめっちゃになったんですね。そして

干ばつです。中村医師は続けて言われます。

「アフガニスタンでは9割前後の人が遊牧民または農民で、内戦前はそれぞれの地域で完結した自給自足の世界を営んでいた。」「長期的に見ると、アフガニスタンに必要なインフラというのは自給自足の農村の復活であって、私たちが考えるような近代国家をあそこに打ち立てるといことは、かえっていろんな矛盾を生み出すのではないか。」

「自給自足の農村の復活である」というところで、私ははっとしたのですが、これは言葉通りとらなくとも、私の恩師である（当時日本女子大学で道元禅とカウンセリングを教えておられました）富山はつ江先生（間接的には、その師匠の富山祖光先生）から教えられた言葉に「身土不二（しんどふに）」というのがあります。そのとき耳から聴いた言葉をそのままお伝えしますと、中国からきた思想で、人間が生まれた土地の五里四方か十里四方には、その人間が一生食べるだけの穀物と薬草を産する、というものです。その土地のものを食べるということを考えてみますと、人間はまず家族のなかに生れます。お母さんがいてお父さんがいて、お祖父さん、お祖母さんもいる。昔は、曾祖父さん、曾祖母さんも一緒でした。これが一つの大家族とすると、これらが集まって集落がありました。この集落のなかでは、皆似たようなものを食べ、善かれ悪しかれ、自治的な生活をしていて、と類推できます。でも、そこで出来ている一つの自治的な人間関係というものは、アフガニスタンのような場合、難民になることで、断ち切られて、バラバラにされてしまいますね。

ここで気が付くことは、このような自然に出来て来た人間の関係、自治的な社会関係というものは、外から人工的に作る事はできない、ということです。野原の雑草の助け合いの共存を思い出して下さい。今のアフガニスタンで試みられていること、あるいはイラクについて想定されていることは、国家を外から造ることですね。米国は裏庭と言われている中南米で、傀儡政権を立ち上げて、そういう国家を外から造ってきましたね。国家は外から造ることが出来ます。あたかも、日本が第二次世界大戦で敗れた時、日本国家というものは—この辺りは非常な議論があるところですが—外から造る事が可能でした。私は当時、小学生でしたが、普通の家族の生活は、そのことによってひっくり返ったりはしませんでした。

市民の一人ひとりが自然につくる集団の生活は、そこにプライドがあります。その土地にできるものを食べたり飲んだりして、育ってゆく人たちの個性や文化があります。人権は普遍的なものでも、その基礎はこうやって作られると思います。それを外から壊してしまえば、二度と同じものは出来ません。水俣病で家族の関係、

コミュニティの関係が壊される、アフガニスタンでも、パレスチナでも、外からの攻撃で家族が四散する・・・世界中でこういうことが起こっています。これは赤裸々な暴力にプラスする構造的暴力の結果です。こういうことに対して、私たちは何ができるのか？長期的な展望が必要です。

足元にもどって考えてみましょう。人間は、生まれる場所を選ぶ事はできません。両親を選ぶ事もできません。好むと好まざるとに関わり無く、特定の集団の中に生まれるのが運命ですね。とすれば、その集団を良いものにするか、悪いものにするかは、私たちにかかっています。すると、「わたしがわたしらしく」生きられるような集団を、作れるか作れないかは、わたしのゲノムにとっても、また人類とその社会の未来にとっても、死活的に重要なことではないでしょうか。

(休 憩)

エンパワメントとわたし エンパワメントとわたしたち

さて後半は、呼吸から入りましょう。ヨガの呼吸のほうが太いと思いますが、私は大学院の頃から坐禅をしてきましたので、今ちょっと、それをやってみませんか？どうしてかというと、四十億年のわたしの生命。わたしのゲノムは、わたしの「いまここ」にしかないわけですよ。で、「わたしのいのち」をどうやって実感するかというのには、呼吸が一番です。人間は呼吸する存在ですから、呼吸が止まったら死ぬわけですね。また、私のかわりに呼吸して下さい、なんてことは出来ませんね。ふだん何気なくやっているのですが、呼吸に意識を集中して、呼吸についてゆく、という経験は大切だと思います。

呼吸には、吸気と呼気がありますね。私が教えられたことを、そのままお話ししますと、坐禅の呼吸は、まず息を吸うときは、あたかも全宇宙を呑み込むようなつもりで、その吸気を足のかかとにまで届かせるように深く、そして息を吐くときは、足のかかとから自然に、全宇宙を吐き出すようなつもりで、というんですね。大切なことは、アタマで何も考えずに、呼吸だけについていくのです。何も考えるなどいっても最初は無理なので、数息観といって数を数えます。呼吸のたびに「ひとつ、ふたつ」と心のなかで数え、「とう」まで数えたら、もとに戻ってまた「ひとつ」から始めます。曹洞宗の道元禅のやりかたは、このあと只管打座（しかんたざ）といって呼吸だけについてゆく坐禅です。臨済宗では、皆さんご存じの公案をつかうやりかたです。

今日は、呼吸だけをやってみましょう。ご無理でなかったら、ちょっと立ち上がって下さい。ここの空気がきれいなことを祈りますが、足は肩の幅と同じくらいに開きます。それから気持をとっても楽にして、あたかもサルが人間に進化したときに、やっと立上がったみたいな、その位な姿勢でいいのです。「気をつけー！」とかいうのは、あれは国家の身体をつくるための体操です。さて、この鐘をちりーんと鳴らすのを合図にしましょう。この間はチベットの鐘を使ったのでまことによかったのですが、これはイタリアの鐘なので、少し勝手が違いますが、三回やりましょう。では「吸って下さい」ちりーん、「吐いて下さい」ちりーん…。はい、有難うございました。どうぞお坐りください。もっとやってもいいんですが、坐禅ですと、お線香の長いのが一本燃え尽きるまで、湿度にもよりますが、大体45分から50分位、坐ります。

どんなお気持ちでしたか？この間、国際関係論・平和学の授業でやはり「エンパワメント」の話をしなければならなかったので、呼吸をしてもらいました。そしたら「とても楽になった」とか「気持がよかった」という感想でした。

つまり、呼吸とは自分のいのちの活動ですね。善くも悪くもありません。ただいのちです。いのちは律動ですから、ちょっと傾いただけでも暴力になるかも知れないし、別の方に傾けば無気力になるかも知れません。この律動を自然に保って行けば、健康であるわけですね。いのちを実感することが、大切なのです。

これが、平和学の方で私が重視している「エンパワメント」という方法と深く関係します。エンパワメントという言葉は、最近とても流行ってきています。どこへいっても「エンパワメントが必要だ！」と言われます。ジェンダー論などでも「女たちよ、エンパワメントだ」と言いますし、発展途上国の方たちに向かっても、エンパワメント！とかけ声をかけたりしがちです。間違いやすいのは、エンパワメントというのは、しっかりしろ！とか、自立しなければならない、というかけ声とは違う、ということです。平和学の立場からは、もしそう響いたら間違いです。エンパワメントの「エン」は接頭語で、「パワー」というのは、この場合は「自分自身の生きる力」です。エンパワメントは「自分自身の生きる力を自分で引き出す」ということです。「パワー」という言葉で気を付けなければいけないのは、今の脈絡のなかでは「生命力」のことですが、例えば国際政治学でパワーといいますと、これは強国のことです。国家間の勢力均衡という意味でのバランス・オブ・パワーの「パワー」とは、まったく違って、「内的な力」であることに、ご注意下さい。

さきほどお話したヨハネスブルグの環境サミットですが、それにNGOとして参加

したネットワーク『地球村』の上村雄彦さんを昨日クラスにお招きして、学生たちと一緒に話を聞きました（「ヨハネスブルグから未来へー国連持続可能な開発に関する世界首脳会議に参加して」）。その講演のなかで、「あ、これってエンパワメントだ!」と思ったことがあります。NGOたちが閉め出されて外で会議をやってる一方、本会議場の正式会議は、国益にしばられて、どんどん話がおかしくなっていくんですね。いくらNGOが抗議しても事態は改善されない。最後に40人位が集まって、皆で考えたんだそうです。やはり、NGOが立ち上がっていかなければ駄目なんだ、ボランティアがしっかりしなければいけないんだ、と意見が一致したけれど、しかし、じゃあ何故われわれの声が届かないのか？つまりわれわれは無力なんだ。では何故無力なのか？皆がバラバラにやってるからいけないんだ、となったそうです。こうして、ではでんでバラバラではなく、ボランティアたちが協力するためには、何が根本的に重要なのか？という議論になってゆきました。そのとき、アフリカの方たちが言ったそうです。「協力するときに一番大切なのは、つまり相手に対する尊敬です。それから相手を信頼することです。そして相手を愛することです。」……相手に対する尊敬と信頼と愛ですね。これは多分三つ一緒のものではないでしょうか。私が、これはエンパワメントだ、と直感したのは、相手を尊敬し、信頼し、愛する、と同時に、自分自身を尊敬し、信頼し、愛さなければ、つまり、そういう心で自分自身と対話する経験が無ければ、相手にも同じことが出来ないだろうと思うからです。つまり、両方あってコミュニケーションのなかでの「エンパワメント」となるのだ、と思うのです。この発言をなさったアフリカのボランティア・グループの方々の中には、きっとこの実践が根付いているのでしょう。それがお話のなかから静かに伝わってきました。

この実践は、カール・ロジャースさんのカウンセリングの「自己受容」と「他己受容」の関係とも似ています。すべての人には生長する素質がある。にもかかわらず生長出来ないのは、何かの疎外要因がある。それに気がつけば、生長する力が自ずから湧いてくる。カウンセラーは対話のうちに、相手（クライアント）の「気が付く」お手伝いをするのですね。この場合もカウンセラー自身が、自分の感情に気がつき、それを受け入れるという自己受容ができていないと、相手の感情に気がつき、それを受け入れるという「他己受容」もできない、ということになります。

ひとつ身近かな例をお話しますと、戦前のお嫁さんとお姑さんの関係です。よくドラマなどになっている極端な例を考えてみましょう。昔はイエ意識がありましたから、それがどんなに自己流のものであっても、お嫁さんは自分のイエ文化から離

れて、夫のイエ文化を受け入れなければいけない。最初は怒られながら泣き泣き自分を押し殺して、だんだんそれに慣れて行きます。やがて息子に嫁を迎え、姑の立場に立つようになると、何時の間にか、かつてのお姑さんにやられたのと同じ事をするように成る、というのがパターンとしては言えるかと思います。お嫁さんをイビル例がよく出て来ますが、これは一見お嫁さんを虐めているようで、その実、自分を虐めているのじゃないか、と思います。自分を壊していると思います。自分だって、こうしたい、ああしたい、ことがあるわけですよ。でも自分はお面のようなものを被って、この家風に従ってずっとやって来た、というのがある。でも、そのことにハッと気がつけば、あ、これは仮面だ、被らなきゃならない時ととってもいい時があるんだ、と分かると思いますが、被りっぱなしに被ってしまうと、仮面が顔に貼り付いてとれなくなる。気がつかないままにお嫁さんに「お前は！」とやるわけですね。確かに日本の文化の中には、型に入って型から出る、という修行の仕方がありますね。その型を名人芸にまで高める芸能というのがありますが、それが上手くいかなかった場合には、自己受容しないままに、強制された自分が自分だと錯角して、で今度、相手もそのように成るように強制するわけですね。そうすると、これは自己受容も出来ていなければ、他との本当のコミュニケーションも出来ていない、というになります。ただ型の押し付けになります。これは「構造的暴力の内面化」という別のテーマで、いまクラスで学生たちと考えを深めているところです。

自分と自分がコミュニケーション出来るというのは、自分のエモーション（湧き起こってくる怒り、喜びなどの感情）に、自分で、あ、こうなんだ、と気がつきそれを受け入れる、ということですね。これが自己受容ですが、仏教のお経の中にもありますが、気がつかない間はそれが一つの執着になっています。それがはっと気がつくとも消えてしまう、執着が消えてしまうと本来の自分、生長する資質をもつ自分が出てくるんですね。つまり本当のコミュニケーションが可能になります。つまり、自他の生命力への働きかけが可能になるんですね。この働きかけの関係が自分の中にも、自分と他との間にも成立し、機能するのがエンパワメントだと思います。

その根本というのが、わたしもあなたも呼吸をする存在である、ということですね。さきほどのような呼吸をする時の感覚をなるべく失わないようにすると、エンパワメントがやりやすくなるかな、と思います。私は、このエンパワメントの関係をお互いの間につくる以外に、私たちが還ってゆく故郷はなくなっているのではないか、と思います。特に日本の社会の場合は、そうではないでしょうか？これが出来るようになれば、一つの平和学の実践が出来ることになります。ですから、身近

なところで、お友達の間やお子さまとの間、家族のなか、夫婦の間とか、できる範囲でこれを実践されると、そこにきっと自治的なコミュニケーションができてゆくでしょう。ひとりひとりの人と人との関係は絶対に侵しがたいもので、外からは見えないですね。わたしとだれかとの関係は、まさに四十億年の生命を踏まえながら、自分の一回限りのゲノムを抱えて、そこで自己受容・他己受容をくりかえした関係が、刻々変わりながら存在しているわけですね。アミーバの運動のようですが、そんななかでも、例えば自分と最初の子供、自分と二番目の子供との関係は、互いに独立していて、他から侵されないものだと思います。ですから何でもごちゃごちゃにすることは、きっと出来ないだろう。そういう独立な関係がそれぞれの間に結ばれていて、それでも皆が一生懸命に生きてゆこうとすれば、四十億年いのちが無くならなかったように、皆が生きてゆく力が湧いてくると思います。

アナーキーと自由連合

最後にアナーキーと自由連合の話をちょっとしましょう。エンパワメントのところで私がお話したことは、殆どそのままアナーキーの話です。アナーキーというのは、一人ひとりが自由の極みを生きていこうとして、自由にやりながら、どこかで自ずと調和がとれているという世界で、あたかも雑草が植物相に従って生きてゆくような感じです。クロポトキンという、一世を風靡したアナキスト（1842-1921）がいたんですが、ロシアの王家の末裔に生まれて植物学者でもあったんですね。そしてシベリアを調査して、それぞれの植物が助け合って生きていることを発見しました。で、ダーウィンの適者生存、それが社会のなかでの弱肉強食に適用された時、それを否定しすべてのものは助け合って生きて来たんだ、シベリアの植物だってそうだ、だから人間の社会も「相互扶助」で作って行くことができるんだ、と説き、歴史的な例証もあげました。今は環境学の中で見直されています。何年か前にイギリスの環境学者と話した時に、今はクロポトキンがとても復活しているんですよ、と話してくれました。私が研究の対象としているイタリアのアナキストのマラテスタ

(1853-1932) (同じように、当時愛されていました) は、アナーキーは理想的な状態で、それを実現する方法がアナキズムである、と言っています。

自由連合とは、一人ひとりの自由意志で連合・連帯するという方法で、アナキズムの内実です。さっきの集団のところでお話したように、一人ひとりとは集団の中に生まれて暮してゆく以外ないわけですが、その集団を、自分自身を生かすようにし

ながら他も生かすような、それぞれが「わたしがわたしらしく」生きられるように、お互いの自由意志で連帯し助け合う集団にすればよい、という考え方です。これに土地の産物や交換という特色がはいってくると、もっと豊富な発想になるでしょう。でも基本は、例えば、茅ヶ崎市の中でAという集団がBという集団と仲良くしようとすると、それぞれの集団のなかの一人ひとりが、ちゃんと自分自身のエンパワメントをしていて、グループの中の関係が自由に保たれていて、そしてグループ全体としても自由意志で、AとBの集団が連帯するというのが、自由連合であり、理論に直すとアナキズムの理論になってゆくわけです。そういう大小の集団が、無限に、水平に連合し合ってゆくと、結果としては、国境はいらなくなる、国家もいらなくなる、もちろんそこで外交関係もいらなくなる、支配と被支配の関係もなくなるから、植民地も戦争もなくなる、と、これは、フランスのアナキスト、ブルードン（1809-1865）が言ったことです。いま未来学のように、実行可能か？ということを含めて考えてみると、この自由な発言は、まさに末世的になってしまった近代国家という人工的な組織集団を前にしての、強烈なパンチです。それが、人間の自由を回復する、わたしがわたしらしく生きられる、新鮮なモデルとしての機能を発揮しつつある、そんな時代に、私たちはすでに入っているのかもしれませんが。現にEU（ヨーロッパ連合）は、マーストリヒト法の中で、ブルードンの小地域自治優先の考え（サブシディアリティの原則）を取り入れています（中原喜一郎「欧州連合と補完性の原則に関する一考察」『法学新報』1995年12月）。

三木成夫さんの胎児の研究でも、私たちは、人類の発生に至る生命の誕生の過程を、自分自身も知らないあいだに体現しながらこの世の中に出て来て、そういう時間と共にいまこのいのちがあるのですね。私たちに身近かな仏教は、宇宙とともに皆助け合って生きてゆきましょうという思想ですから、お経のなかにも、この願いを實踐することができる自分自身のことを、尊敬し愛しなさい、とあります。気がつけば、仏教もエンパワメントの思想ですね。エンパワメントこそ、いまや生まれつつある「地球民主主義」の根であり、この自由の根は無数にあって、私たちがそこから出発できる故郷だと思います。

いのちを大切に、助け合って生きてゆきましょう、というのが今日の講演の主旨ですが、すでに世界の各地で、自分にできるやり方でこの希望の實踐にとりくんでいる仲間たちがいます。21世紀の創造的な「地球市民」群は、もう存在しているのです。平和学は、この新しく出現した地球市民群とともに歩んでいきます。

参考文献

富山はつ江『禅とカウンセリングー実践のこころー』（山喜房佛書林、1996年）

戸田三三冬「平和の方法としてのアナキズム」（太田一男編『国家を超える視角』
法律文化社、1997年）

同「地球民主主義の芽」「地球市民への道」（岡本三夫・横山正樹編『平和学の現在』
法律文化社、1999年）

同「平和学とは何か」（『ジョイン』第38号、2000年8・9月号）

同「アナキーな幸せ」（コリーヌ・ブレ編著『人間アナキー』
モジ・カンパニー、2002年）